幼年教育研究年報　第28巻　51－59
The Annual Research on Early Childhood, 2006

幼児における空想と現実の区別の認識

富田　昌平[1]・原　　充代[2]

Young children's understanding of the fantasy / reality distinction

Shohei Tomita[1] and Mitsuyo Hara[2]

Young children's understanding of fantasy / reality distinction were investigated. We presented children with pictures portraying fantastical scenes and real-life scenes. In fantastical scenes, personified animals, supernatural creatures, and magicians were included. In real-life scenes, ordinary people and ordinary animals were included. After describing the picture, children were asked whether the depicted event could really happen. Although three-year-olds were not able to distinguish fantastical scenes from real-life scenes, five-year-olds were able to. Children were able to distinguish it more in the order of personified animals, supernatural creatures, and magicians. These results were also discussed in terms of the individual difference of fantasy / reality distinction.

Key Words : fantasy / reality distinction, cognitive development, individual difference, young children.

問題と目的

子どもはかなり幼い頃から空想（fantasy）の世界に触れる。早い場合には生後12ヶ月からふり遊びを始め，３－４歳頃には現実の世界ではあり得ないような様々な生き物を含んだ精巧な空想物語を，遊びの中で作り出せるようになる（Samuels & Taylor, 1994 ; Singer & Singer, 1990 / 1997）。大人たちはそのような子どもの遊びを奨励するとともに，絵本や物語などを通して，イメージや想像や空想を豊かにしようとする。

初期の研究において，空想は何よりも代理満足を与えるものであり，気晴らし，現実逃避など，外的世界からの避難所と見なされてきた（Person, 1995 / 1997）。このように空想には不健康で否定的なイメージが先行しがちであったが，近年では，空想は外界を形作る上で大きな役割を果たしており，人間の生活を形成し構成する上で最も強力な触媒の一つとなり，人間の行動や性格を方向づけ，人生の進路を決める上でも重要な役割を果たすといった見方が支配的となっている（Singer & Singer, 1990 / 1997）。つまり，空想は人間の生活や人格発達においてきわめて重要な意味を持つ。では，それこそ人間発達の初期にあたる幼児期において，子どもは空想世界と現実世界とをどのように区別し，認識しているのであろうか。

幼児期・児童期における空想と現実の区別の認識を扱った先行研究を広く集めると，想像と現実，夢と現実，ふりと現実，テレビと現実，見せかけと本当など，空想と現実のみならず様々な視点からこの問題が扱われていることが分かる（e. g., DiLalla & Watson, 1988 ; Flavell, Flavell, & Green, 1983 ; Flavell, Green, & Flavell, 1986 ; Jaglom, & Gardner, 1981 ; Wellman & Estes, 1986 ; Woolley & Wellman, 1992）。しかしながら，これらの研究では，しばしば似通ってはい

1　山口芸術短期大学保育学科
2　出雲市立荒木幼稚園

るが異なる方法論が採用され，また異なる認識の側面に焦点が当てられており，ゆえに描かれる発達の推移や転換点も一様ではない。そこで本研究では，その種の研究の中でも，Taylor & Howell（1973）の研究をはじめとする絵本の絵を材料とした一連の研究を取り上げ，そこでの議論を出発点として，幼児における空想と現実の区別の認識問題を扱うことにする。

幼児における空想と現実の区別の認識を扱った古典的研究の一つにTaylor & Howell（1973）の研究がある。彼らは，様々な絵本の中から，現実的な絵６枚と空想的な絵６枚を選び出し，３歳から５歳の78名の子どもに「何をしている絵だと思う？」「ここに描かれているようなことは本当に起こると思う？」と尋ねた。研究の結果，現実的な絵では３歳でもほとんどの子どもが“本当に起こる”と正しく判断できたが，空想的な絵では本来“本当に起こるはずはない”にもかかわらず，“本当に起こる”と誤って判断した子どもが多く見られた。４歳児もまだ空想的な絵の判断について確信が持てないようであった。しかし，５歳児になると成績は大きく向上し，多くの子どもが正しい判断を示すことができた（正答率は各12，43，77％）。

次に，Morison & Gardner（1978）は，Taylor & Howellが行ったような区別課題に加えて，３枚のカードによる組み合わせ課題を行い，子どもが自発的に“空想”というカテゴリーを用い始めるのはいつ頃かを調べた。例えば，子どもに“魔女－妖精－ほうき”や“Big Bird－Mickey Mouse－鳥”といった３枚の絵カードを提示し，「２枚の絵がペアになるのだけれど，どれだと思う？」「どうしてそれだと思った？」「その他の組み合わせも作れるかな？」と尋ねた。子どもたちは異なる４つのセットを見せられ，それぞれに２度組み合わせを作るよう求められた。対象となったのは幼稚園児，小学２年生，４年生，６年生各20名である。実験の結果，区別課題では幼稚園児でさえも70％が正しい判断を示すことができたのに対し，組み合わせ課題では自発的に“空想”カテゴリー（例；「両方とも本当はいない」「両方とも魔法」）を用いる子どもは少なく，幼稚園児で24％，最も使用した６年生でさえも43％に過ぎなかった。Morison & Gardnerは，２つの課題の結果から，幼児が空想と現実を区別していないと主張するのは間違いであると述べた上で，ただしその区別はまだ十分に確立されておらず，児童期を通じて発達し続けると述べている。

さらに，Samuels & Taylor（1994）は，Taylor & Howell（1973）の課題を若干修正して，幼児の区別能力を再度検討した。３－４歳児30名と４－５歳児32名を対象にした調査の結果，正答率は３－４歳児で45％，４－５歳児で76％であり，先行研究を支持するものであった。またSamuels & Taylorは，刺激となる絵が恐怖を喚起させる内容であった場合，現実に起こり得る内容であるにもかかわらず“現実に起こらない”と誤って判断してしまう幼児の傾向も明らかにし，現実認識における感情喚起の影響を示唆している。

以上の研究結果をもとに，空想と現実の区別の認識に関する幼児期から児童期にかけての発達的推移をFigure 1にまとめた。区別課題での

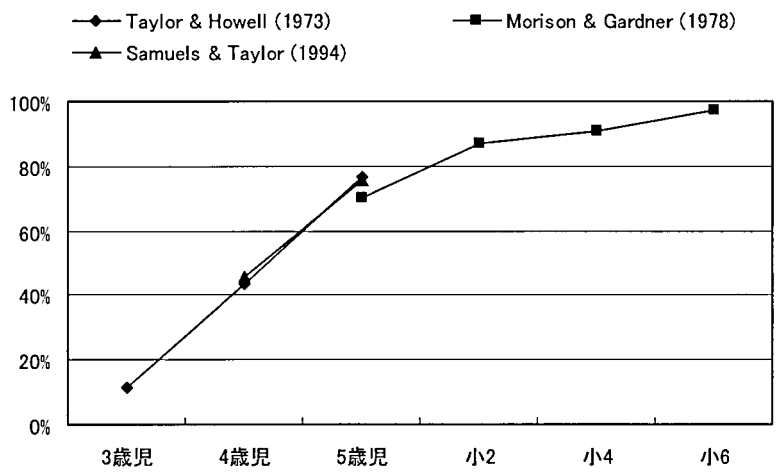

Figure 1　空想と現実の区別判断の発達推移

空想的な絵に対する正答率を従属変数とした。また，Samuels & Taylorの研究の被験児である3－4歳児と4－5歳児は，平均月齢の近かった4歳児と5歳児のグループに含めた。Figure 1から，空想的な絵を見て“本当には起こらない”と判断することは，幼児期の終わりまでに正答率80％近くにまで向上し，その後児童期の間により安定的になることが分かる。子どもたちは6歳頃までに，ある人物や生き物が空想か現実かどちらなのかを問われた場合に，その位置づけにおいて非常に安定した判断を行うことができるようになるのである。

しかし，この種の先行研究において取り上げられる存在のカテゴリーは，いつも空想の存在か現実の存在かである。しかし，空想的な要素を含む絵本や童話や児童文学について多少の理解を持つ者ならば，こうした分類はいささか乱暴で不十分であることに気づくであろう。空想の存在に関して言えば，その存在のタイプは主に3つに分けられる。1つは，例えば，絵本「ぐりとぐら」（中川李枝子・作，山脇百合子・絵）に登場するリスたちのように，人間と同じように服を着て言葉を話す動物たちである。2つめに，例えば，絵本「かいじゅうたちのいるところ」（モーリス・センダック・作，絵）に登場する怪物たちのように，現実には存在しない架空の生き物たちである。3つめに，例えば，児童文学の「ピーター・パン」（ジェームス・バリ・作）や「ハリー・ポッター」（J・K・ローリング・作）に登場する人物のように，空を飛んだり魔法を使ったりする人間たちである。他方，現実の存在に関して言えば，その存在のタイプは主に2つに分けられる。1つは，ごく普通に生活している人間たちであり，もう1つは，同じくごく普通に生活している動物たちである。

先行研究において，このような存在のタイプ分けによって空想と現実の区別の認識を探った研究は皆無であるが，幼児期の子どもたちが空想と現実をどのように区別し認識しているのかについて，より深い知見を得るためには，この種の問題について検討しておくことは重要であると思われる。以上をふまえて，本研究では絵本に描かれている絵の中から，空想世界の絵として（1）人間のような動物，（2）架空の生き物，（3）魔法を使う人間，現実世界の絵として（4）普通の人間，（5）普通の動物を取り上げ，それぞれの絵について現実世界で起こるかどうかを尋ねる。それによって，幼児期における空想世界と現実世界の区別に対する認識の発達の詳細を調べることにする。

なお，絵本に描かれる空想世界には，しばしばサンタクロースやイースターバニー，歯の妖精なども含まれるが，本研究ではそうした特定のイベントと関連する慣習的な想像物は扱わないことにする。なぜなら，これらは社会・文化的に広く認知され，“実在する”との信念が他と比べて強く奨励されていることから，先行研究において異なる発達の推移が示されているからである（e. g., Blair, McKee, & Jernigan, 1980；Prentice, Manosevitz, & Hubbs, 1978；Rosengren, & Hickling, 1994；杉村・原野・吉本・北川, 1994；富田, 2002）。つまり，これらは，先の絵本に登場する空想世界の存在とは異なる認識の側面を扱ったものと考えることができる。よって本研究では，サンタクロースやイースターバニー，歯の妖精など慣習的な想像物を除いた想像物を，研究の対象として取り上げることにする。

方　法

被験児　Y市内のK幼稚園に在籍する年少児24名（男児13名，女児11名，平均年齢：3歳7ヶ月，年齢範囲：3歳3ヶ月から4歳2ヶ月），年中児31名（男児17名，女児14名，平均年齢：4歳7ヶ月，年齢範囲：4歳3ヶ月から5歳2ヶ月），年長児34名（男児16名，女児18名，平均年齢：5歳6ヶ月，年齢範囲：5歳3ヶ月から6歳2ヶ月）が参加した。

材　料　絵本の中の絵20枚を材料とした。20枚の絵は，（1）人間のような動物，（2）架空の生き物，（3）魔法を使う人間，現実世界の絵として（4）普通の人間，（5）普通の動物という5つのカテゴリーにつき各4枚で構成された（Table 1を参照）。空想の絵12枚，現実の絵8枚であった。

手続き　実験者は事前に何度か幼稚園を訪問し，被験児たちとラポールを形成した後，幼稚園の応接室で個別に面接を行った。まず，実験者は被験児に，今から絵本の中の絵をいくつか見せること，絵本の中の絵には現実世界で本当に起こることと，夢の中や絵本の世界でしか起こらないこととがあること，そしてそのことについて今から判断してほしいことを伝えた。実験者は被験児の目の前に，○と×のカードを提

Table 1　材料として使用した絵本の絵

空想の絵		現実の絵	
人間のような動物	ブタが服を着て生活している ゾウが服を着て船に乗っている ウサギが人間のように食事をしている クマがバケツを持って水を汲んでいる	普通の人間	台所で親子が話をしている 子どもが服を着替えている 子どもが海辺で遊んでいる 子どもと老人が話をしている
架空の生き物	怪獣が子どもと遊んでいる 子ども部屋に恐竜がいる 森の中にドラゴンがいる 池のほとりに蛙と妖精がいる	普通の動物	アヒルとイヌが庭にいる ロバが草を食べている スズメが池のほとりに集まっている アリが道端を歩いている
魔法を使う人間	人間が空を飛んでいる 人間を乗せた船が空を飛んでいる 少年のベッドが空を飛んでいる バスが宇宙を飛んでいる		

示して，“本当に起こること”と思ったら○，“夢の中や絵本の世界でしか起こらないこと”と思ったら×を指さすように求めた。実験内容が理解できたかどうかを確かめるために，実験前に2回ほど練習試行を行った。練習試行で○×カードへの指さしが正しく行えることを確認した後，本試行を行った。

本試行では，Table 1に示すような空想の絵12枚，現実の絵8枚，計20枚をランダムな順序で提示した。被験児の回答については，あらかじめ間違っても問題がないことを伝えておき，その回答が正しくても間違っていても実験者は同様の反応を行った。また，回答の正誤にかかわらず，その判断の理由を尋ねた（「どうしてそう思ったの？」）。ただし，理由の質問については，20枚の絵すべてに要求することは被験児の負担が大きいと考えたため，すべてではなく数回ランダムに理由づけを求めるにとどめた。

結果と考察

空想と現実の区別の認識　まず，提示された絵に対して子どもが“現実に起こり得る”と判断した場合に1点，“現実に起こり得ない”と判断した場合に0点を与え，各年齢，各領域，各存在のタイプごとに平均値を算出した。Figure 2はその結果を示したものである。空想の絵は0点に近いほど正しい判断に近く，現実の絵は1点に近いほど正しい判断に近いことになる。

Figure 2から，年少児では空想の絵と現実の絵とを明確に区別することが困難であるが，年中児や年長児になると空想の絵と現実の絵とを次第に明確に区別できるようになることがうかがえる。こうした結果に対して，正答を1点として領域ごとに平均値を算出し，それをもとに3（年齢）×2（領域：空想，現実）の分散分析を行った。その結果，年齢の主効果（$F(2, 86) = 13.13, p < .001$）が有意であった。多重比較（テューキーのHSD検定）を行った結果，年長児は他の2つの年齢群よりも有意に高い成績を示したことが分かった（$p < .001$）。正答率は，空想の絵で年少児から順に59%，61%，81%，現実の絵で54%，73%，79%であった。この結

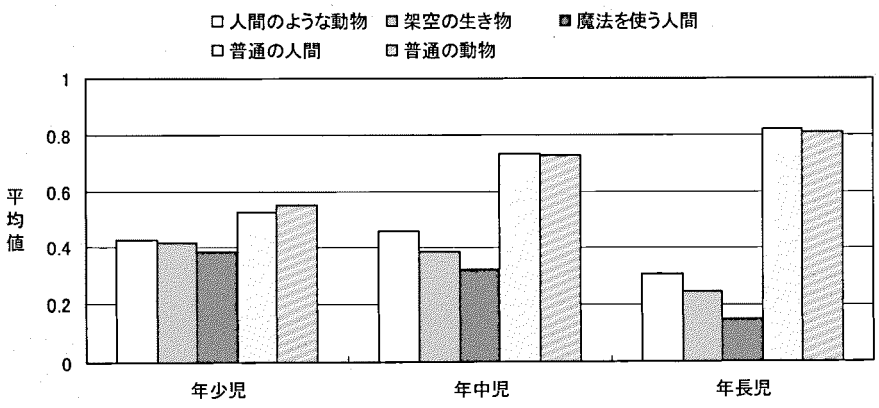

Figure 2　空想／現実の区別判断の回答

果は，年少児ではまだ安定的でなかった空想と現実の区別の認識が，年長児までに十分に発達することを示唆するものであり，先行研究（Taylor & Howell, 1973 ; Samuels & Taylor, 1994）の結果とも一致する。

空想の存在のタイプによる認識の差異　次に，空想の存在のタイプによって認識に違いがあるかどうかを調べるために，3（年齢）×3（タイプ：人間のような動物，架空の生き物，魔法を使う人間）の分散分析を行った。その結果，年齢の主効果（$F(2, 86) = 4.44, p < .05$）とタイプの主効果（$F(2, 172) = 5.69, p < .001$）が有意であった。多重比較（テューキーのHSD検定）を行った結果，年長児は他の2つの年齢群よりも有意に高い成績を示したこと（$p < .05$），“魔法を使う人間”は“人間のような動物”よりも有意に高い成績を示したこと（$p < .001$）が分かった。各タイプの正答率は“人間のような動物”から順に62%，67%，72%であった。この結果は，空想の存在のタイプによって子どもの認識に違いがあることを示すものであり，中でも，人間のように言葉を話し行動する動物は，子どもにとって最も“ありそう”なのに対して，魔法を使って空を飛んだりする人間は最も“なさそう”であり，怪物や妖精など架空の生き物はその中間に位置することがこの結果から示唆された。

次に，各絵に対する子どもの回答の偏りについて年齢比較を行った。Table 2は各絵に対する肯定（現実に起こり得る）と否定（現実に起こり得ない）の回答の人数とχ^2検定の結果を示したものである。Table 2に示すように，空想の絵12枚中6枚，現実の絵8枚中6枚において，有意差（$p < .05$）または有意傾向（$.05 < p < .10$）が見られた。空想の絵では，回答の偏りの年齢差は“魔法を使う人間”で最も多く見られ（3枚），次いで“架空の生き物”（2枚），“人間のような動物”（1枚）であった。この結果は，空想の存在のタイプによる認識の違いを示した先述の結果を支持するものであると言える。

個別の回答パターンに見られる個人差　さらに，20枚の絵に対する個々の子どもの回答パターンについて分析を行った。まず，空想の絵に関しては，12枚中10枚以上で“現実に起こり得ない”と回答した場合，“空想なし”と判定し，逆に12枚中10枚以上で“現実に起こり得る”と回答した場合，“空想あり”と判定した。また，現実の絵に関しては，8枚中7枚以上で“現実に起こり得ない”と回答した場合，“現実なし”と判定し，逆に8枚中7枚以上で“現実に起こり得る”と回答した場合，“現実あり”と判定した。さらに，このような回答の偏りのいずれ

Table 2　各絵に対する肯定・否定の回答の人数とχ^2検定の結果

		年少児（N=24）		年中児（N=31）		年長児（N=34）		
		肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定	
人間のような動物	ブタ	14	10	14	17	8	26	$\chi^2(2) = 7.51, p < .05$
	ゾウ	9	15	12	19	6	28	$\chi^2(2) = 4.20$, ns
	ウサギ	9	15	16	15	11	23	$\chi^2(2) = 2.61$, ns
	クマ	9	15	15	16	10	24	$\chi^2(2) = 2.47$, ns
架空の生き物	怪獣	6	18	11	20	7	27	$\chi^2(2) = 1.89$, ns
	恐竜	12	12	11	20	6	27	$\chi^2(2) = 6.88, p < .05$
	ドラゴン	9	15	12	19	6	28	$\chi^2(2) = 4.20$, ns
	妖精	13	11	14	17	8	26	$\chi^2(2) = 6.21, p < .05$
魔法を使う人間	人間	8	16	11	20	5	29	$\chi^2(2) = 4.23$, ns
	船	10	14	9	22	4	30	$\chi^2(2) = 6.81, p < .05$
	ベッド	7	16	9	22	3	31	$\chi^2(2) = 5.35, .05 < p < .10$
	バス	12	12	11	20	5	29	$\chi^2(2) = 8.48, p < .05$
普通の人間	会話	12	12	23	8	27	7	$\chi^2(2) = 6.22, p < .05$
	着替え	15	9	22	9	27	7	$\chi^2(2) = 2.01$, ns
	水遊び	12	12	26	5	30	4	$\chi^2(2) = 12.87, p < .01$
	老人	11	13	20	11	26	8	$\chi^2(2) = 5.73, .05 < p < .10$
普通の動物	アヒル	16	8	17	14	21	13	$\chi^2(2) = 0.82$, ns
	ロバ	14	10	24	7	29	5	$\chi^2(2) = 5.61, .05 < p < .10$
	スズメ	12	12	25	6	26	8	$\chi^2(2) = 7.00, p < .05$
	アリ	11	13	24	7	30	4	$\chi^2(2) = 13.30, p < .01$

にも属さない，中間的な回答の場合には“ニュートラル”と判定した。以上の判定の結果，9つの回答パターンが得られた。①空想なし／現実あり，②空想なし／現実なし，③空想なし／ニュートラル，④ニュートラル／現実なし，⑤空想あり／現実あり，⑥空想あり／ニュートラル，⑦ニュートラル／現実あり，⑧空想あり／現実なし，⑨ニュートラル／ニュートラル。次に，これらの回答パターンを，統合型，否定型，肯定型，混同型という4つのより大きなカテゴリーへと分類した。統合型は，空想世界は起こり得ないが，現実世界は起こり得ると判断した者（①空想なし／現実あり），否定型は，全体的に空想世界も現実世界も起こり得ないと判断した者（②空想なし／現実なし，③空想なし／ニュートラル，④ニュートラル／現実なし），肯定型は，全体的に空想世界も現実世界も起こり得ると判断した者（⑤空想あり／現実あり，⑥空想あり／ニュートラル，⑦ニュートラル／現実あり），混同型は，空想世界は起こり得るが，現実世界は起こり得ないと判断した者（⑧空想あり／現実なし），あるいは全体的に回答の偏りが見られなかった者（⑨ニュートラル／ニュートラル）である。

この4分類は富田（2004a）で使用されており，そこでは年中児48名のうち，統合型9名（19%），否定型12名（25%），肯定型19名（40%），混同型8名（17%）が確認されている。富田（2004a）の研究では，空き箱の中にネズミを想像させ，その現実性の判断を行動面と主張面から観測する空箱課題との関連を調べたところ，ネズミは単なる想像だから現実にいないと主張しながら，箱に触ったり空けたりする行動を示した者は否定型に多く，逆に，箱に対する行動はないものの，ネズミは現実に箱の中にいるのではないかと主張した者は肯定型に多く見られるという個人差が報告されている。本研究では，この結果をふまえつつ，統合型，否定型，肯定型，混同型の子どもは各年齢でどの程度存在し，それは発達的にどう変化するのかに焦点を当てて分析を行った。

Table 3は各回答パターンの人数を示したものであり，Figure 3は統合型・否定型・肯定型・混同型という4つの型の各年齢における割合を示したものである。TableとFigureから分かるように，年少児では混同型は約半数（46%）を占めるが，年中児（26%），年長児（12%）で減少し，逆に，統合型は年少児（8%）では少なかったものの，年中児（16%），年長児（56%）と増加した。また，否定型はいずれの年齢群においても約4分の1確認され，肯定型は年中児において多く見られた（35%）。以上の結果についてχ^2検定を行ったところ，有意差が見られた（$\chi^2(6) = 25.43, p < .01$）。下位検定の結果，年少児では混同型，年中児では肯定型，年長児では統合型が他の年齢群に比べて有意に多く，逆に年少児と年中児では統合型，年長児では混同型が他の年齢群に比べて有意に少ないことが示された。以上の結果から，（1）幼児期の最初あいまいで不安定であった空想と現実の区別の認識は，幼児期の終わりまでに安定的になること，（2）絵本の中の事象を全般的に否定しがちである否定型の子どもは，幼児期を通じて4分の1程度存在すること，（3）絵本の中の事象を全般的に肯定しがちである肯定型の子どもは，年中児期に増加し，その後減少する

Table 3　各回答パターンの人数

	年少児 (N=24)	年中児 (N=31)	年長児 (N=34)
統合型	**2**	**5**	**19**
空想なし／現実あり	2	5	19
否定型	**6**	**7**	**8**
空想なし／現実なし	2	1	2
空想なし／ニュートラル	1	6	6
ニュートラル／現実なし	3	0	0
肯定型	**5**	**11**	**3**
空想あり／現実あり	2	6	2
空想あり／ニュートラル	0	2	0
ニュートラル／現実あり	3	3	1
混同型	**11**	**8**	**4**
空想あり／現実なし	0	0	0
ニュートラル／ニュートラル	11	8	4

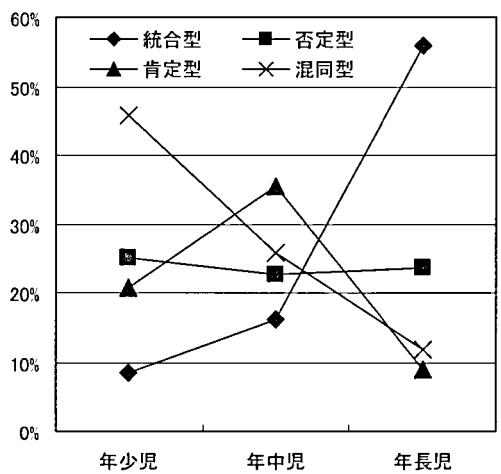

Figure 3　空想と現実の区別に関する個別の回答パターン

ことが示唆された。

自らの判断に対する理由づけ　最後に，子ども自らの空想と現実の区別に対する理由づけの結果について述べる。方法で述べたように，本研究では子どもの課題負担を考えて，すべての判断機会において理由づけを求めたわけではなかった。従って，以下に述べることはあくまで参考程度にとどめてもらいたい。まず，子どもは提示された絵の現実性を否定したときよりも肯定したときの方が，より理由づけが困難なようであった。彼らの多くは肯定した後に理由づけを求められると，黙ってしまうか，提示された絵の場面をただなぞるか（例：「ウサギがご飯を食べている」），自分が持っている知識や情報の中から似たものを取り出して，そのことを述べるか（例：「ハリーポッターみたい」）のいずれかであった。そのことは空想の絵の場合に顕著であり，現実の絵の場合には，自分自身の経験と照らし合わせた推理が多く見られた（例：「自分も公園でお山を作るから」，「見たことがあるから」）。

他方，空想の絵を否定した後の理由づけには，その空想性を指摘したり（例：「ブタは人間の格好をしない」，「ドラゴンは映画の中にしかいない」），自らの知識や経験をもとにしたり（例：「バスは飛ばない。道路を走る」，「人間が飛ぶところを見たことがない」），ネガティヴな感情を喚起させて拒否的な反応を示す（例：「恐い。本当にいたらどうしよう」，「怪獣がいたら家が壊れるからダメ」）などが見られた。先行研究（Samuels & Taylor, 1994）では，①説明できず，②知識・経験（例：「今まで見たことがないから」），③ファンタジー／現実（例：「怪物は現実ではない」），④感情（例：「ワニは人にかみつくので好きじゃないから」），⑤夢（例：「それは単なる夢だから」），⑥その他（例：「ママがそう言っていた」）の6つが確認されており，本研究でも同様の説明が確認されたといえよう。

ところで，否定したときよりも肯定したときの方が，より理由づけが困難ということに関しては，子どもに限らず大人でも同様のように思われる。否定したときには，何らかの間違いを見つけそれを指摘すればよいのだが，肯定したときには多くの場合，「実際そうなのだ」という自らの確信を強調するより他にない。こうしたことは質問そのものが抱えている問題であり，今後の研究への課題であるといえよう。

総合考察

本研究では，幼児における空想と現実の区別の認識について，3歳から6歳の幼児を対象に，絵本に描かれる空想と現実の場面が現実に起こり得ると思うかどうかを尋ねることによって検討を行った。その結果，主に次の3点が明らかにされた。（1）幼児期の最初あいまいで不安定であった空想と現実の区別の認識は，幼児期の終わりまでに安定的になり，空想と現実についての正しい区別が行えるようになる。（2）空想の存在のタイプによって子どもの認識には違いがあり，中でも，人間のように言葉を話し行動する動物は，子どもにとって最も“現実に起こり得る”可能性が高いのに対して，魔法を使って空を飛んだりする人間は最も“現実に起こり得る”可能性が低く，怪物や妖精など架空の生き物はその中間程度として考えられているようである。（3）空想と現実の区別の認識が不安定である混同型の子どもは年少児に多く，逆に安定的である統合型の子どもは年長児に多く見られる。また，絵本の中の事象を全般的に否定しがちである否定型の子どもは，幼児期を通じて4分の1程度存在し，逆に肯定しがちである肯定型の子どもは，年中児期に増加し，その後減少するようである。

1つめの結果に関しては，先行研究の結果を支持する形となった。Figure 1に示した先行研究の発達推移に，本研究の年少児59%，年中児61%，年長児81%という正答率を加えてみるとよい。先行研究の結果よりも年中児までの正答率が若干高めではあるが，幼児期の終わりまでに80%前後の安定的な数値にまで到達するという結果は繰り返された。個別の回答パターンの結果からも，年長児が空想と現実との区別をかなり選択的に行っていることがうかがえるであろう。

2つめの結果に関しては，なぜ空想の存在のタイプによって認識の違いが見られたのかについて，もっと詳しい考察が必要である。なぜ“魔法を使う人間”は子どもにとって起こり得ないこととして判断されやすく，逆に“人間のような動物”は起こり得ることとして判断されやすかったのであろうか。考えられる理由の1つに，親をはじめとする大人の奨励といった社会的環境の影響があげられる。大人は動物に対して特別な愛情を持って接するとき，例えば，家畜ではなくペットや家族の一員として動物と

接するとき，しばしば動物を人間と同様の「心」を持つ存在として扱う（藤崎，2002）。また，大人は子どもに動物を家畜として見るよりも，ペットや家族の一員として見る見方を期待するであろう。このことから，大人は子どもに動物を指し示すとき，動物を擬人的に扱うような言葉がけやふるまいを日常的に行っていることが予想される。

他方，魔法を使う人間に関しては，人間のような動物ほどに大人は奨励しないのではなかろうか。“人間のように言葉を話す動物がいる”という空想は，子どもの動物に対する愛情や生命全般を大切にする態度を育てるのに役立つかもしれないが，“ある種の人間は魔法を使うことができる”という空想は，子どもの夢や憧れを育てる一方で，子どもじみたあきらめの悪さや攻撃性を増進させるかもしれないといった恐れを，大人に連想させるかもしれない。親をはじめとする大人が子どもの空想のどの部分を奨励し，どの部分を奨励しないか，それによって子どもの認識も差異を含む形で発達するのである。その他にも存在論的カテゴリーについての知識の獲得やさまざまな事物や事象に対する推理能力の発達とも関係が予想されるが，これらの点については本研究の結果のみでは明らかにすることはできないので，今後の課題としたい。

3つめの結果に関しては，本研究では子どもの回答パターンを統合型，否定型，肯定型，混同型の4つに分けた結果，興味深い発達差と個人差が示された。年少児から年長児にかけて混同型が減少し，統合型が増加するという結果は予想通りのものであったが，否定型がいずれの年齢群においても4分の1程度見られること，肯定型が年中児期においてのみ多く見られることについては予想外の結果であった。しかも，本研究での年中児の結果と富田（2004a）での年中児の結果は非常に似通っていた（統合型16% vs. 19%，否定型23% vs. 25%，肯定型35% vs. 40%，混同型26% vs. 17%；前者が本研究の結果）。もちろん両研究では分類基準が異なるため明確なことは言えないが，年中児において肯定型の子どもが多いという結果は，今後検討に値する現象ではなかろうか。

1つ考えられる仮説として，年中児期はまだ大人の情報の真実性を疑わない無垢な状態が彼らの認識や態度に支配的であるため，空想の存在に対する彼らの憧れはピークに達し，ゆえに彼らは肯定気分へと傾倒する。しかしながら，年長児期になると大人の情報の真実性を疑わない無垢な状態からも脱却し，空想の存在に対する彼らの憧れは減退する。その結果，それまでの肯定気分は影を潜め，否定気分へと転じるのである。情報の真実性に関する幼児の能力については，見かけと本当の区別（Flavell et al., 1983, 1986）や嘘の見破り能力（Ford, 1996 / 2002 ; Lee, Cameron, Doucette, & Talwar, 2002）を扱った研究において検討がなされており，やはり年中児期の発達的変化が指摘されている。加えて，空想の存在に対する憧れについては，幼児の「将来の夢」を扱った研究（富田, 2004b）において検討がなされており，年中児期は他の年齢群よりも空想のキャラクターを将来の夢としてあげることが多いことが報告されている。いずれにしても，今後さらなる証拠や事例の積み重ねが必要であろう。

文　献

Blair, J. R., McKee, J. S., & Jernigan, L. F. 1980 Children's belief in Santa Claus, Easter Bunny, and Tooth Fairy. *Psychological Reports*, **46**, 691-694.

DiLalla, L. F., & Watson, M. W. 1988 Differentiation of fantasy and reality : Preschooler's reactions to interruptions in their play. *Developmental Psychology*, **24**, 286-291.

Flavell, J. H., Flavell, E. R., & Green, F. L. 1983 Development of the appearance-reality distinction. *Cognitive Psychology*, **15**, 95-120.

Flavell, J. H., Green, F. L., & Flavell, E. R. 1986 Development of knowledge about the appearance-reality distinction. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **51**, Serial No. 212.

Ford, C. V. 1996 *Lies! Lies!! Lies!!! : The psychology of deceit*. American Psychiatric Pub. 森英明（訳）　2002　うそつき　草思社

藤崎亜由子　2002　人はペット動物の「心」をどう理解するか：イヌ・ネコへの言葉かけの分析から　発達心理学研究, **13**, 109-212.

Jaglom, L. M., & Gardner, H. 1981 The preschool television viewer as anthropologist. In H. Kelly & H. Gardner (Eds.), *New direction in child development : No. 13. Viewing children*

through television (pp. 9-30). San Francisco : Jossey-Bass.

Lee, K., Cameron, C. A., Doucette, J., & Talwar, V. 2002 Phantoms and fabrications : Young children's detection of implausible lies. *Child Development*, **73**, 1688-1702.

Morison, P., & Gardner, H. 1978 Dragons and dinosaurs : The child's capacity to differentiate fantasy from reality. *Child Development*, **49**, 642-648.

Person, E. S. 1995 *By force of fantasy : How we make our lives*. London : Faber and Faber Ltd. 岡昌之・浅尾秦（訳）1997　人はなぜ空想するのか　翔泳社

Prentice, N. M., Manosevitz, M., & Hubbs, L. 1978 Imaginary figures of early childhood : Santa Claus, Easter Bunny, and the Tooth Fairy. *American Journal of Orthopsychiatry*, **48**, 618-628.

Rosengren, K. S., & Hickling, A. K. 1994 Seeing is believing: Children's explorations of commonplace, magical, and extraordinary transformations. *Child Development*, **65**, 1605-1626.

Samuels, A., & Taylor, M. 1994 Children's ability to distinguish fantasy events from real-life events. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 417-427.

Singer, D. G., & Singer, J. L. 1990 *The house of make-believe : Play and the developing imagination*. Cambridge, MA : Harvard University Press. 高橋たまき・無藤隆・戸田須恵子・新谷和代（訳）1997　遊びがひらく想像力：創造的人間への道筋　新曜社

杉村智子・原野明子・吉本史・北川宇子　1994 日常的な想像物に対する幼児の認識：サンタクロースは本当にいるのか？　発達心理学研究, **5**, 145-153.

Taylor, B. J., & Howell, R. J. 1973 The ability of three-, four-, and five-year-old children to distinguish fantasy from reality. *Journal of Genetic Psychology*, **122**, 315-318.

富田昌平　2002　実在か非実在か：空想の存在に対する幼児・児童の認識　発達心理学研究, **13**, 121-134.

富田昌平　2004a　幼児における想像の現実性判断と空想／現実の区別認識との関連　発達心理学研究, **15**, 230-240.

富田昌平　2004b　幼児期における「将来の夢」と空想／現実の区別認識　幼年教育研究年報, **26**, 105-113.

Wellman, H. M., & Estes, D. 1986 Early understanding of mental entities: A reexamination of childhood realism. *Child Development*, **57**, 910-923.

Woolley, J. D., & Wellman, H. M. 1992 Children's conceptions of dreams. *Cognitive Development*, **7**, 365-380.

付記

本論文は，第二著者が山口芸術短期大学専攻科幼児教育専攻に提出した卒業論文（2004年度）のデータを第一著者が再分析し，加筆・修正したものです。調査にご協力いただきました幼稚園の先生方，子どもたちに深く感謝いたします。